

## 学位論文内容の要旨

学位申請者	岡 千春 【比較社会文化学専攻 平成23年度生】	要 旨
論文題目	踊ることによって生成される身体 －その様相と構築過程－	<p>上演芸術である舞踊において、身体とは媒体であり、芸術家そのものでもある。こうした特徴により、舞踊における身体のあり方は、様々な視点から議論されうる問題である。しかし、従来舞踊における身体について語られる際、身体や身体の動きの見え方、あるいは踊られている振り付け（動き）そのものが議論の対象となりやすく、ダンサー個人の内面の問題と身体とのかかわりや、ダンサーの身体の変容という視点が重視されることは少ない。</p> <p>本研究は、一定以上の舞踊経験に裏付けられたダンサーの身体を「舞踊する身体」とし、その身体の様相、およびその身体が構築されていくプロセスを、文献とダンサーの言の照合に基づいて明らかにすることを目的としている。</p> <p>最初に、ダンサーが目指す舞踊する身体を「心身一如」的状态であると仮定し、舞踊活動における心身一如について東洋哲学の理論を通して、湯浅、西田らの論から、ダンサーは稽古を積むことで心身関係が変容し、上演時に行為的直観を体験することが明らかになったと言え、またそれは世阿弥が論じた「無心」状態と通じていることが示唆された。</p> <p>次に、舞踊する身体に至るには、「修行」としての心身の訓練が必要であると考えられ、その過程は、身体技術の習得にとどまるのではなく、日常の心身のあり方へも作用すると言え、このような熟達過程を、Parviainen の論じた practice of the self から考察した。そして、5名のダンサーを対象として実施したインタビュー調査によって、ダンサーに意識される舞踊する身体は、①《表現性・伝達》、②《技術》、③《他者とのかかわり》、④《ダンサーの主体性》の4つの側面を有することが明らかになった。また、舞踊の稽古においては、基礎的な身体訓練が継続的に行われ、上演経験や他者からの評価を得ることによって、ダンサーは稽古時の意識構造を変化させていくことが示唆された。</p> <p>本研究では、ダンサーは舞台上で行為的直観を体験し、心身一如の状態に至っていると考えられるが、その心身状態は、身体訓練を積んで得られるものと言うよりも、ダンサーが独自の舞踊観に基づく主体性をもって、かかわりとしての舞踊に従事することで至る境地であると結論づけている。</p>
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	
	教授 米田 俊彦	
	教授 新名 謙二	
	教授 永原 恵三	
	早稲田大学人間科学学術院 教授 浅田 匡	